『怒るな働け』の心は・・・

林　望

大正デモクラシーの時代になると、嘉悦孝のような考え方は、旧弊思想だと見做されていたらしい。

なにぶんとも、『怒るな働け』に「女性は矢張女大学風で育てられた女性でなければなりません」とあったりして、現代から見ても、それはかなり古めかしい感じに受け取る人が多いのもやむを得ない。

一方で、慶応義塾の福澤諭吉は、夙に男女の平等を唱導して『女大学』の如き女訓書を完膚無きまでにやっつけていたのだから、同じ明治の教育家としては、一見正反対の立ち位置にあったように見える。

しかしながら、この両極端の教育家が、不思議に一致して提唱している点が一つある。すなわち、女性が計数実学に暗くてはいけない、なかんずく経済という方面に実力を涵養しなくては、新時代の女性のあるべき姿として望ましくないと主張していることである。

どんな思想も「時代」ということを無視しては成り立ち得ない。孝は、明治維新期の殖産興業、富国強兵の時代思潮のまっただ中に人となった。この時代相のなかで、苦学力行の人孝は「花よりも実」を取るために、有能で役に立つ女性を育てたい、それにはどうしたらいいかと考えたに違いない。そして男が、どんな人格であるにせよ、女がひたすらに実直に、孜々として己の務めを果たし、家庭を立派に経営して毫も揺るがぬ手腕を示したならば、畢竟それは女性の価値を高からしめ、ついには男子をして刮目せしめるであろうと、こういう論法であったように思惟される。なんでも男に盲従して泣き寝入りせよ、などという旧思想を祖述しているのでは決してないことに、私どもはよく注意しなくてはならぬ。

明治から大正という時代には、男は外で働き、女は内を守る、というのが日本人の「当たり前」であった。そこから、やっと少しばかり「職業婦人」というものが出現してきたくらいのところであった当時、家事といっても電化製品があるでなし、子供の数は五人も八人もあって、その家事と育児だけでも、こんにちの主婦とは比較のしようもないくらい多岐にわたる超重労働であったし、それをきちんとこなそうと思えば、外で働く余裕などは無かったと見るのが当然である。

そういう時代相のなかで孝は、であるならば、まずなんとしても「合理的」に家事を遂行し、また夫が働いて得た金を、決して不条理な浪費をせぬように、予算を立て、簿

記式の家計帳をつけ、質素倹約して貯蓄に努め、そうして一家を立派に経営していく「経営者的手腕」ある女性こそが、ほんとうに新時代の女であると、そういう意識だったのであろうと思われる。

そのためには、過剰な化粧や服飾などを避け、菜食を主として身体壮健なるを図り、たくましく聡明な婦人たるべきことを提唱しているのである。『怒るな働け』にはまた、たとえば「これからの人は、日に焦けたり指が太くなるのを厭ふやうでは、世の中を渡ることは出来ません」といい、「新しいとか改良とかを絶叫する人々の多い現代の潮流に女子教育の舟を泛べて、依然と『経済思想養成』の一大旗を掲げまして、末頼母しき望のある淑女の教育に腐心し」ともいうのは、まさにこの意識の発露であろう。

決して旧時代の弱々しく無力無学な女に戻って男に隷属せよなどというのではない。女には女の、その時代のなかでの「最善」の尽くしようがあるはずだ、と孝の主張はそこにこそあるのである。

ちょうど、明治四十四年には、平塚らいてうが『青鞜』を創刊し、そこに拠っていわゆる女性解放運動、女権拡張の主張を展開したのであるが、これも一つの時代相であった。そこで論者の女性たちは、男子の専横や国家主義に怒りをぶつけ、家庭内で働くことよりも社会に出て行こうとする女性たちが脚光を浴びていた時代でもあった。また、片えには、「カチューシャの唄」の松井須磨子や宝塚少女歌劇など、文字通りモダンなる女性の風潮なども現れてきて、かれこれ、女性のあるべき姿が見失われかねない状況、それを孝は、実学と倫理の力で「女の真価」を分からせようとしたのだと、私は見ている。こぶしを振り上げ、口角泡を飛ばして百の議論をするよりも、華美に着飾ってモダン女性を気取るよりも、ただ黙々として自らのなすべき仕事をきっちりとこなしていけば、やがて女の真価は誰にも分かるであろう、そこに嘉悦孝の立脚点があった。

孝は『花より実をとれ』の中で、こうも言っている。

「何しろ人間の英気を養ふには働くに越した事はありません。働けば新陳代謝が劇しく行はれるので、いつも新らしくなつて行くことが出来ます。私はこれからの婦人にもつと働く事を望みたいのであります」

これは娘として妻として母として、いつも骨身を惜しまず働けという論で、必ずしも職業を持てという意味ではないけれど、しかし、今日から見ても、まことに堂々たる正論と言うほかはない。